

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04784

研究課題名（和文）地域・国際教育に深く関わる国語科教師が教科書依存の教科内容観を拡張する過程の解明

研究課題名（英文）A Study on Extension Processes of Views on School Subject in Japanese Language Teachers Involved with Regional or International Education

研究代表者

丸山 範高（MARUYAMA, Noritaka）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：50412325

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国語科教師が、教科書教材依存の正解収束型解釈の教科内容観を、地域教育実践あるいは国際教育実践に関わる経験を通じて、拡張するに至る過程要因の多様性を解明した。地域密着型高校、国際バカロレア認定校に勤務する教師を研究協力者とし、授業観察とインタビュー調査とを複数回実施した。調査・分析の結果、教師間での共通性と、教師ごとの多様性が明らかになった。教師間の共通性として、教材文を俯瞰的・構造的に読む読み方へ教材の読み方観が変容するとともに、評価観・授業形態観の柔軟性が増強した。一方、教師ごとの多様性として、実践の拠りどころとなる理論の性質、教科内容観拡張に伴う情動などに違いが見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高校国語科授業では、教師の教材解釈に生徒の理解を収斂させていく授業が少なくないという課題があり、生徒の学びをより豊かに保証するためには教師のあり方が問われている。また、国語科教育に関わる先行研究では、教科内容としての「読みの技術」が徐々に研究されてきたが、実践当事者である教師が、生徒の学習をどう見取り、どんな教科内容観をベースに実践を導き出しているのかという、実践の文脈を伴った教師視点での教科内容研究は十分とは言えない状況にある。したがって、当事者である教師が自身を取り巻く教育環境を見据えながら、専門性を成長・発達させる学習プロセスを解明した本研究は社会的にも学術的にも意義に富む。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to elucidate diversity of Professional Development in transforming Japanese language teachers' views on school subject. This study analyzed teachers' narratives through interviews using narrative approach. It was found that regional teachers and international baccalaureate teachers transform Japanese language teachers' views on school subject by reflecting educational environment.

研究分野：教科教育学

キーワード：教師の専門性 教師の学習 教師の信念 国語科教師 ナラティブ・アプローチ 国際バカロレア 地域教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマである国語科教師の専門性発達に関わる研究を取り巻く背景について、(1)学校現場における教育実践の動向、(2)教科内容に関わる研究、(3)国語科教師に関わる研究の3点に分けて説明する。

### (1) 学校現場における教育実践

高校国語科「読む」領域の授業では、教科書掲載の文章を教材とし、教師の解釈に生徒の理解を収斂させていく授業が多くを占めるという課題がある。これは、「高校の教師は、教科(学問)の専門主義が強く、教師としての専門文化の伝統が薄い。」(佐藤 2013)と言われるように、教材に関わる専門的知見を、価値ある文化・伝統として生徒に吸収させようとする学習・指導観を高校教師たちが持っているためである。また、「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向」(文部科学省 2019)があると指摘されている。こうした、学問的知識の注入に偏った授業では、生徒の学びの広がりや深まりを見取ること、あるいは、現在の学びを過去・未来の学びとつなぐこと、などがままならなくなる。生徒の学びをより確実かつ豊かに保証するためには授業づくりの主体である教師のあり方が問われていると言えよう。

### (2) 教科内容(国語科)研究

教科の内容に関わる研究の成果が教師の専門的知識として機能し国語科授業実践を導く。国語科教材を「読む」領域の研究では、実践の当事者である教師の視点から、生徒が学びを豊かにする授業という具体的文脈をふまえて教科内容を構成するという研究が十分でない状況にある。もちろん、発問や評価のあり方、教材文の分析方法などに関する教師の指導技術を論じた井上(2005)をはじめとして、教科内容としての「読みの技術」を重要視しつつ、読む行為の内実を「解釈」と「分析」の統合に見出した鶴田(2010)、読むための様々な方法を三つの指導過程に位置づけて整理した阿部(2015)など、授業実践の指針となる優れた知見が数多く発信されてきた。しかしながら、実践の当事者である教師が、生徒の学習状況をどう見取り、どんな教科内容観をベースに実践を導き出しているのかという、実践の文脈を伴った教師視点での教科内容研究は十分とは言えない状況にある。

### (3) 国語科教師研究

これまでの国語科教師研究として、特定教師の卓越性、教師としての規範、成長発達の方法論など、多くの研究成果がある。たとえば、著名教師の優れた実践の特質を解明する研究(藤原・遠藤・松崎 2006)(伊木 2019)、国語科教師としてあるべき規範を論じた研究(鶴田 2007)、授業を省察する方途に関する研究(澤本 1996)などが見られる。しかしながら、当事者である教師が自身を取り巻く教育環境(生徒の実態・外圧としての教育課程など)を見据えながら、専門性を成長・発達させる学習プロセスに関する研究は十分ではない。また、企業等の人材育成に関わっては、人が経験からいかに学ぶかという経験学習研究が進展しているが(松尾 2006)、そうした教師以外の人の成長・発達に関わる研究と国語科教師研究との関連性が考察できていない状況にある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高校国語科教師が教師の専門的見識の1つである教科内容観を拡張するに至る過程要因の多様性を解明することにある。教育実践経験とその省察を重ねることで、教師たちが教科内容観をどのように拡張させてきたのか、さらに、教科内容観はどのような要因によって拡張が導かれたのかについて、教師間での共通性と、教師ごとの多様性を解明する。

本研究における分析テーマとして教科内容観に着目した理由は次の通りである。

教師の信念は「教師の授業での意思決定や具体的行動を支えている」(秋田 2000)ため、授業実践は教師一人ひとりが拠りどころとしている信念(教育観、生徒観、授業観、教科観など、授業実践を支える諸要因の理想に関する考え方・観)を通して現象する。したがって、教師の信念は教職専門性を表す概念の1つと言えよう。本研究テーマである教科内容観とは、教師が保有する信念体系の一部をなし、教科の学習指導に関わる信念を表す。国語科教師の教科内容観とは、国語科という教科独自の教育内容についての教師の信念であり、教材の読み方観、理想の国語学習状態についての生徒観、国語科授業形態観などが含まれる。教科内容観に着目して調査結果を分析することで、国語科を担当する教師の専門性のあり方が解明されるため、研究テーマ・調査結果分析の軸として教科内容観を設定した。

研究活動においては、次の3点に焦点化した分析を行った。

(1) 地域(内)あるいは世界(外)へ開かれた教育課程を持つ高校に勤務し、教科書依存の教科内容観を拡張せざるを得ない必然的環境にある国語科教師たちの事例を分析した。具体的には、地域とのつながりを重視した高校に勤務する教師や、国際バカロレア認定校でディプロマプログラムを担当する教師を研究対象者とした。

(2) 初任時より現在に至るまでの、教科内容観(国語科学習・指導に関わる教師の信念)の拡張の様相を分析した。教材解釈のあり方、生徒の学習状況の見取り、学習評価のあり方、国語科学習が目指すべきものなど、教科内容観を構成する事項について、拡張前後を比較しつつ、違いを浮き彫りにした。

(3) 教科内容観の拡張を導いた要因について、教師を取り巻く教育環境、教師自身の情動の観点から分析した。

### 3. 研究の方法

本研究は、地域密着型高校に勤務し地域教育実践に取り組む教師（以下「地域教育教師」と記す）と、国際バカロレア認定校でディプロマプログラムを担当し国際教育実践に関わる教師（以下「バカロレア教師」と記す）と、それぞれ教育環境の異なる高校国語科教師を研究協力者とし、授業観察とインタビュー調査によってデータを収集した。調査は、3年の研究期間内に毎年1回すべての教師を対象に継続し、年度を超えての一貫性に注目してデータ分析を進め、研究成果を導いた。調査によって得られたデータは、インタビューにおける教師の語りを分析の中心とし、その他のデータ（授業観察記録・教材・ワークシート・板書記録など）は、インタビューデータを補強するものとして位置づけた。分析方法として、ナラティブ・アプローチ、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を採用としながら、授業の事実に基づいて語られた教師の語りを分析し、研究テーマである教科内容観の拡張に関わっての教師の経験世界を解明した。

本研究が対象とする教科内容観とは、特定教科（国語科）の授業を実践する教師の専門性を象徴する経験に基づく知見であり、それは実践を通じて更新され続ける（変化プロセスを持つ）ものと捉える。この知見は、教師の経験の文脈から切り離された文化的内容を示すものでもないし、教師の経験を部分的・断片的に取り立てたものでもない。実践経験をベースに、実践を取り巻く諸事象を教師自身が包括的に意味づけ構成した、教師の教科に対する経験的な見方を表す概念である。こうした、実践を行う当事者が意味づけた包括的経験世界に迫るためには、当事者の語りを組織立てて描き出すことが必要であり、そのために本研究ではナラティブ・アプローチを研究方法として採用したのである。ナラティブ・アプローチとは、「経験の具体性や個性性を重要な契機にして」「順序立てることで成り立つ」（野口 2005）ものであり、「経験の組織化としての物語」（やまだ 2006）と言われる。それは、論理実証モードとは異なる特徴を持つ。「個別の体験を当事者の立場から描くことにおいて有力な視点を提供」（森岡 2013）し、「ある『トポス（場所）』における『むすび』によって、新しい意味が生成」（やまだ 2006）され続けるという意味づけの変化プロセスを重視するといった物語モードの特徴を持つ。ナラティブ・アプローチが持つこうした特徴は、教師の経験的知見である教科内容観の拡張過程について、個別教師ごとの多様性を解明しようとする本研究に有効である。

さらに、ナラティブ・アプローチによる分析結果（個別教師ごとの分析結果）を教師間で比較し、共通性が認められる点については、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の手順に基づきながら、複数の調査対象者（研究協力者）に共通する概念・理論を抽出した。教師主導の教材解釈を収束・誘導する実践から、生徒主体の教材解釈を生成・発展する実践へと授業改善を志す高校国語科教師を「分析焦点者」（木下 2003 pp.138-139.）として、経験に伴う教科内容観の拡張プロセスという「分析テーマ」（木下 2003 pp.131-137.）について、複数の調査対象者（研究協力者）に共通する概念・理論を抽出した。

### 4. 研究成果

地域教育教師と、バカロレア教師と、それぞれ複数の国語科教師を対象とした調査（授業観察・授業観察をふまえてのインタビュー調査）を行い、教師が持つ教科内容観の拡張という観点から、研究成果を導いた。教科内容観の拡張については、教師間での共通性と教師間で異なる個性が明らかになった。

教師間での共通性は次の通りである。

（1）教科内容観のうち、教材の読み方観については、一義的・収束型の解釈から、多義的・拡散型の解釈への拡張が見られた。一義的・収束型の解釈とは、ある特定の観点から作品表現の意味を導き出し、一面的に教材世界を表象する解釈のあり方である。一方、多義的・拡散型の解釈とは、多様な批評の方法を駆使しつつ作品表現を多角的に分析し、多面的・重層的に教材世界を表象する解釈のあり方である。たとえば、収束型の解釈では、主人公視点のみから作品世界を表象するのみであったのに対し、拡散型の解釈では、主人公視点のみならず脇役人物の視点からも作品世界を表象し、作品世界の重層性を味わうというような読み方ができるようになる。

（2）教材の読み方観としての多義的・拡散型の解釈とは、教材文を、段落ごと場面ごとに断片的・部分的に読むのではなく、全体を統括しつつ俯瞰的・構造的に読む読み方によってなされる。そうした解釈の結果は、教材世界の豊かな表象化と、教材世界についての自分ならではの意見の論理的構成とによって教室で提示されることが目指される。教材世界の豊かな表象化とは、教材文中の言語を媒介とした概念の拡充を意味するが、これは、無秩序な概念の表象化ではない。生徒自身の実経験との関連、教材文の書かれ方など、根拠の裏付けに基づく、幅広い意味での論理性が重んじられ、それは教材世界についての自分ならではの意見の論理的構成ということになる。

（3）教材の読み方観が上記（1）のように拡張するに伴い、教材解釈に関する生徒の反応の評価観も連動して変容する。教師があらかじめ定めた限定的な解釈に到達できたか否かという点から一面的に評価する評価観から、視点の置きどころによって異なる多様な解釈を尊重する多面的な評価観への変容が見られた。

（4）国語授業形態観についても教材の読み方観の拡張に伴い、ハイブリッドなものへと拡張している。一義的・収束型の教材解釈であれば、教師対生徒の応酬による授業形態が中心となるが、

多義的・拡散型の教材解釈では、教師対生徒の応酬のみならず、生徒対生徒の応酬(個人別発表・集団協議)も含まれ、かつ、後者の比重が大きくならざるを得ない。

教師間で異なる個性性は次の通りである。

(1) 教科内容観拡張の要因として機能する教育理論の影響について、バカロレア教師と地域教育教師とは異なる。「あらゆる教育実践は意識的、無意識的な理論を内包し、その理論によって遂行されている」(佐藤 2015)と言われるように、拠りどころとなる理論をベースに教育実践は展開される。バカロレア教師は国際バカロレア機構が提供し、それへの適応を迫られる外在理論を拠りどころとするのに対し、地域教育教師は実践経験を通じて内発的・自己創造的に立ち上げた理論を拠りどころとしつつ、それぞれ実践を展開する傾向にある。

バカロレア教師たちは共通して、国際バカロレア機構が示す評価の枠組み(理論)が実践に大きく影響していると語る。外部評価・内部評価を通じて生徒にバカロレア資格を取得させねばならないため、教材の理解(解釈)とその表現に関わる評価規準(読み方・書き方)に拠った実践が求められる。生徒独自の視点で文学を分析的批判的に評価し意見を表明するという理論(半田 2017)をベースとした実践が展開される。

一方、地域教育教師の場合、学習指導要領等に示される教育理論を意識しないわけではないが、バカロレア教師のように外部から強く縛られる性質の理論とはなっていない。本研究で調査対象とした教師たちは、外圧として作用する理論ではなく、実践経験を通じて内発的・自己創造的に立ち上げた【生徒の社会性の成長を導く教材との関わり】とも言うべき理論を自らの実践の拠りどころとしていることがわかった。本研究における地域教育教師たちが向き合う生徒たちは、国語学習に関して少なからず課題を抱える生徒たちである。そのため、高校卒業後の社会生活に資する言語能力の育成を重要視するのである。

(2) 企業等の人材育成に関わる経験学習研究において、人の成長を促す経験特性は「発達の挑戦(developmental challenge)」という概念で括られ、変化へ挑戦する経験が成長を促すこと(松尾 2006)が実証されている。この「発達の挑戦(developmental challenge)」を余儀なくされているのがバカロレア教師である。ディプロマプログラムにおける文学の授業では、文部科学省検定教科書は使用せず、文庫本 1 冊全体を教材としながら、根拠に基づいた学習者独自の読みを練り上げることが求められる。こうした実践は、教科書掲載の抜粋教材を使用し解釈を収束させる類の慣習的国語科教育実践とは異なる変化が求められるため「発達の挑戦(developmental challenge)」の契機となる。

ただし、教育実践を成り立たせているどの事象を「発達の挑戦(developmental challenge)」として意味づけるかは、教師間で差異が見られた。ある教師は、教材開発・教材解釈を重厚なものとする点に変化への挑戦を見出し、別の教師は、生徒の解釈を多面的に価値づける点、教師自身の解釈とは相容れない異質な生徒の解釈と葛藤する点にそれぞれ変化への挑戦を見出すといったように、教師間で差異が見られた。

一方、地域教育教師は、バカロレア教師たちのように全く新しいカリキュラムに適応することを強く求められることはないため、「発達の挑戦(developmental challenge)」に関わる新たな事象が教師たちの語りにおいて取り立てられることはなかった。しかしながら、地域教育教師たちも、生徒の学習状況を見極めながら不断に授業改善を図った結果、初任教師時とは異なる教科内容観を獲得しているため、急激な変化への挑戦は経験していないものの、緩やかな変化により、教師としての専門性を向上させていることがうかがえる。

このように経験学習における「発達の挑戦(developmental challenge)」をめぐる意味づけは、その有無を含めて個々の教師間で異なり、それぞれの教師が多様なプロセスで専門性を向上させていることが明らかになった。

### (3) 教師の情動

教科内容観の拡張経験に伴う情動については、教師間で多様性が見出される。

バカロレア教師の場合、実践への導入・適応を迫られるディプロマプログラムをめぐる種々の情動が発言する。ディプロマプログラムを肯定的に意味づける教師たちは、ディプロマプログラムに出会って教育実践の自由裁量が拡大したことに開放感を覚える教師、教育実践のシステム化が促され授業のやりやすさを実感する教師、教材解釈の相互承認の大切さを実感することで学習の醍醐味を認識する教師である。また、ディプロマプログラムを必ずしも肯定的に意味づけていない教師は、ディプロマプログラムに相当する教育実践をディプロマプログラムに関わる以前から継続しているため目新しくはなく、逆に、ディプロマプログラムの評価基準の幅が大きすぎるため教材解釈の甘さを助長することにつながりかねないと懸念する。

一方、地域教育教師は、高校卒業後の社会生活に資する言語能力の育成の重要性を常に認識し、生徒の社会性の成長を導く教材解釈実践を継続している。そのため、自身の教育実践の社会的意義を自覚することで、教師としての実存感覚を得ていると考えられる。

## 引用文献

阿部昇(2015)『国語力をつける物語・小説の「読み」の授業』明治図書

秋田喜代美(2000)『授業観・授業に対する信念』森敏昭・秋田喜代美編『教育評価重要用語 300 の基礎知識』明治図書 p.224.

藤原頭・遠藤瑛子・松崎正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプロ一チ』溪水社

- 半田淳子 (2017) 『国語教師のための国際バカロレア入門』大修館書店
- 伊木洋 (2019) 「1970年代前期における大村はま話しことば学習指導の検討」全国大学国語教育学会 『国語科教育』 86
- 井上尚美 (2005) 『国語教師の力量を高める 発問・評価・文章分析の基礎』 明治図書
- 木下康仁 2003 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂
- 松尾睦 (2006) 『経験からの学習』 同文館出版
- 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説国語編』 東洋館出版社 p.6.
- 森岡正芳 (2013) 「ナラティブとは」やまだようこほか編『質的心理学ハンドブック』新曜社 p.276.
- 野口裕二 (2005) 『ナラティブの臨床社会学』 勁草書房 p.6.
- 佐藤学 (2013) 「高校改革の課題」佐藤学ほか編著『「学びの共同体」で変わる！高校の授業』p.19.
- 佐藤学 (2015) 『専門家として教師を育てる 教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店 p.76.
- 澤本和子 (1996) 『わかる・楽しい説明文授業の創造』 東洋館出版社
- 鶴田清司 (2007) 『国語科教師の専門的力の形成 授業の質を高めるために』 溪水社
- 鶴田清司 (2010) 『解釈 と 分析 の統合をめざす文学教育』 学文社
- やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念」心理学評論刊行会 『心理学評論』 49-3 p.440.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 丸山範高	4. 巻 134
2. 論文標題 地域・国際教育実践へ関与する国語科教師における教科内容観の揺らぎの諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語科教育研究 全国大学国語教育学会第134回大阪大会発表要旨集	6. 最初と最後の頁 141-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山範高	4. 巻 45
2. 論文標題 経験から学ぶ国語科教師における教科内容観の変容がもたらす意義 国際バカロレア教育実践に関わる教師の事例より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教科教育学会全国大会論文集	6. 最初と最後の頁 172-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸山範高
2. 発表標題 地域・国際教育実践へ関与する国語科教師における教科内容観の揺らぎの諸相
3. 学会等名 第134回全国大学国語教育学会・大阪大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山範高
2. 発表標題 経験から学ぶ国語科教師における教科内容観の変容がもたらす意義 国際バカロレア教育実践に関わる教師の事例より
3. 学会等名 日本教科教育学会 第45回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----